

日本人英語学習者に適した テスト形式とは何か

—オンラインテストと口頭テストの比較検討—

兵庫県／神戸学院大学附属高等学校 教諭 船越 貴美

概要

テスト技術の進歩とコンピュータの普及によって多様なテスト形式が開発されるようになり、従来の紙と鉛筆を用いた筆記テストに代わって、コンピュータを用いたテストが開発され、テスト形式と採点方法に変化をもたらした。本研究では、異なる2つのテスト形式を使って同じ質問をし、評価基準をあわせて得られた採点結果と、テスト後のアンケート結果によって、どちらのテスト形式がよりコミュニケーション能力を発揮できるかを検証した。実験には私立高等学校1年生199名が参加し、英語母語話者による直接対面式の口頭テストと、インターネットの回線でつながれたコンピュータの画面を見ながらキーボードで解答を入力するオンラインテストの両方を受験した。その結果、口頭テストは英語によるコミュニケーション能力を測定するテストとして、日本人学習者に適したテスト形式であると考えられるが、テストの信頼性を高める必要があることがわかった。また、オンラインテストは客観的な採点が可能となるが、解答時間やIT環境の整備などの課題を見直す必要があることが明らかになった。

1 はじめに

言語能力をテストでどのように測定するかは、古くから多くの議論がなされ、現在も研究が続けられている。最近では、テスト作成の開発や改善、評価方法を専門領域とする「テストング」という分野の研究が進み、多くの研究家たち(Brown, 2005; Bachman & Palmer, 1996; Hughes, 2003; 池田, 2001;

大友・中村, 2004; 静, 2002; 若林・根岸, 2000) によって改善がなされてきた。

テスト技術の進歩とコンピュータの普及によって、テスト形式も変化した。従来の紙と鉛筆を用いた筆記テストに代わって、コンピュータを用いたテストが開発され、テスト形式と採点方法が多様になった。

アメリカの大学へ留学するときに必要な英語力を測定するTOEFL (CIEE, 2008) は、2000年10月に紙ベースの試験と並行して、コンピュータ形式のテスト、TOEFL CBT (Computer-based Testing) を導入した。これにより、紙ベースで受験者一斉に行われていたリスニングテストが個人のブースで行われるようになり、採点もコンピュータで処理されるようになった。また、2006年7月にはインターネット版のテスト、TOEFL iBT (Internet-Based Testing) が導入され、文法セクションがなくなり、新たにスピーキング・セクションが導入され、受験者はコンピュータの画面に向かったままマイクを通じて音声録音するシステムが開発された。

テスト形式の違いによって受験者の心理的負担は軽減され、言語能力をより正確に測ることができるようになったのだろうか。日本の学校教育では、いまだ紙と鉛筆を使った筆記テストが圧倒的に多く採用されている。今後はコンピュータを導入したオンラインテストが普及される可能性はあるのだろうか。また、英語のコミュニケーション能力を測るために、直接対面式の口頭テストが行われているが、TOEFL iBTのように面接官の代わりにコンピュータ画面に向かって話しかけても、同等の能力を測定できるのであろうか。

本研究では「英語母語話者との直接対面式の口頭テストとコンピュータを使用したオンライン筆記テストでは、日本人学習者の英語運用能力を測るのにどの程度差が出てくるのか」を異なる2つのテスト形式を使って得られたテスト結果によって検証した。また「どちらのテスト形式が日本人学習者にとって英語のコミュニケーション能力を発揮することができるのか」を検証する。

2 テスト形式

言語能力を測るために古くからテストが使われてきたが、紙と鉛筆を使った筆記テストがほとんどであった。入試問題や検定試験、学校で行われる小テストや試験など、物理的・時間的背景から圧倒的に紙と鉛筆を使ったテストが多かった。筆記テストでは学習者の言語知識（英文法や語法）と論理的思考力を測ることができるという利点がある。

しかし、言語能力は必ずしも言語知識だけを指すものではない。口頭発表力を測る面接テストでは口頭運用能力と同時に、コミュニケーション能力が問われる。昨今コミュニケーション能力をどのように測るかが議論的となっている。このコミュニケーション能力という概念は、Hymes (1972) によって提唱された考えで、「言語知識を現実社会でどの程度使えるか」という能力を指している。最近では Bachman (1990) によって、コミュニケーション能力は Communicative Language Ability と呼ばれ、「言語能力」、「状況対処能力」、「心理・生理的機制」の3つの要素からなると説明されている。コミュニケーション能力は、現実世界での言語使用と状況判断を含めて総合的に判断される能力なので、口頭テストが多く採用されてきた。しかし評価が主観的になるので、測定した結果の信頼性の検討と研究が課題となっている（大友・中村, 2004）。

最近ではコンピュータを使ったオンラインテストなども広く開発されており、コンピュータを単体で使うテスト（Computer-based Testing: CBT）とコンピュータをインターネットにつないで学習者のレベルに応じて問題を選別してくれるコンピュータ適応型テスト（Computer adaptive testing: CAT）の2種類がある。コンピュータ適応型テストはコンピュータ技術と項目応答理論に基づ

いて開発されたテスト形式で、TOEFL CBT のリスニングと文法セクションで導入された（大友・中村, 2004）。受験者が1問ずつ試験を解答するごとに正解・不正解をコンピュータが処理し、正解率が高い受験者には難易度の高い問題を、正解率の低い受験者には平易な問題をコンピュータが選んで出題するという方式である（山田, 2006）。つまり、同一試験日に受験する受験者は、すべて同じ問題に解答するわけではないのである。

英語を母語としない人たちの英語能力を測るために、英語検定試験やTOEFL, TOEIC, IELTS, Cambridge 英検、国連英検などの検定試験が開発されてきた。いずれの試験も英語の4技能（聞く、読む、書く、話す）の能力がどの程度あるかを測るテストである。英語検定試験（1963年開始）、国連英検（1981年開始）、Cambridge 英検（1913年開始）、IELTS（1989年開始）では言語知識と英語運用能力を総合的に測るために対面式の口頭テストが行われている。TOEFL と TOEIC には口頭テストはなかったが、TOEFL は2006年7月に導入した TOEFL iBT（TOEFL Internet-Based Testing）によりスピーキング・セクションを新設した。また、TOEIC でもスピーキングとライティング・テストが開発され、従来の TOEIC 試験とは別に受験することができるようになった。TOEIC のスピーキング・テストでも、TOEFL iBT と同様に人間との対面式ではなく、マイクを使ってコンピュータ上の画面に向かって音声を入力するシステム（ETS, 2009）となっている。

このように検定試験における英語能力を測るテスト形式もさまざまに変化してきた。学校教育においてもコンピュータの導入でテスト形式が少しずつ変化し、評価方法も多様になってきた。

3 本研究で使用したテスト形式

3.1 オンラインテストとは

本研究で扱うオンラインテストとは、コンピュータの画面上に現れる英語の質問に英語で答えを入力する筆記テストのことを指す。紙の代わりにディスプレイを、鉛筆の代わりにキーボードを使い、解答および採点もコンピュータ上で処理するテストである。

本研究で使用したオンラインテストは、NEC が

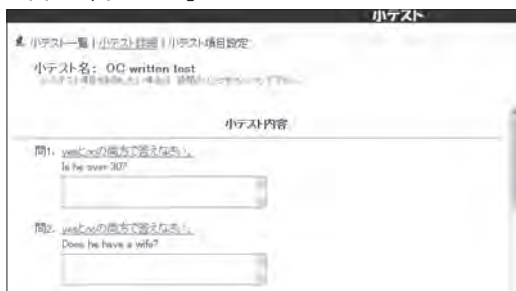
開発したグループソフトウェア『学びの泉』(図1)の機能の1つであるテスト作成ツールを使って実施した。このソフトウェアは、神戸学院大学附属高等学校の生徒が使用しているノートパソコンにあらかじめインストールされており、教師と生徒が校内および校外でインターネットを通じて使用することができ、個人的なメールのやり取り、アンケート、小テスト、電子掲示板などに活用されている。

この『学びの泉』には、「小テスト」(図2)というテスト作成ツールがあり、教師が必要に応じてオンラインテストを作成することができる。問題文、設問、選択肢、解答を入力すれば、コンピュータが自動的に解答欄を作成してくれる。「小テスト」は記述式にも対応しているので、記述式の英作文の作成も比較的容易にできる。ただし、記述式の場合は、採点を自動でできないので、紙ベースの答案の採点と手間はさほど変わらない。

▶ 図1:「学びの泉」



▶ 図2:「小テスト」



3.1.1 オンラインテストの長所

オンラインテストの長所は次のようにまとめられる。

1. 画像や音声ファイルが添付できるので試験項目

に多様性がある。音声を聞いてリスニング・テストを作成することもできるし、マイクを使って録音し、スピーキング・テストを作成することもできる。

2. 口頭テストと比較して、受験者の心理的負担が少なくすむので、テスト結果が口頭テスト結果より若干よくなる傾向がある。オンラインテストと口頭テストの結果に関する先行研究には、Dunkel (1999), Kenyon & Malabonga (2001) などがあり、オンラインテストと筆記テストの結果の比較には、Russell & Haney (1997) や Schaeffer et al. (1998, April) などがある。
3. 採点に手間がかからない。多肢選択テストの場合、コンピュータが自動的に採点してくれるので、時間の節約になる。

3.1.2 オンラインテストの短所

オンラインテストの短所は次のようにまとめられる。

1. コンピュータとインターネットに接続している環境が必要なので、IT環境が整わない場所では実施不可能である。
2. スピーキング・テストでは、自分の意見を伝えることはできるが、対話形式の試験は不可能である。英検の二次試験における口頭テストでは、試験官との対話が中心となるので、そのようなテストには対応できない。
3. 試験を生徒全員に同時に始めないと、先に問題を解いた生徒が未受験の生徒に教えてしまう危険性がある。これは、紙ベースの試験でも同じことであるが、同期性が不正行為を防ぐ手段となる。オンラインテストの場合、いつでも好きな時間にテストを受けられるので、不正行為を防ぐ手立てが必要である。

3.2 口頭テストとは

口頭テストとは、試験官と受験者が対面で行う面接試験のことを指す。オンラインテストと同様に、紙と鉛筆を使わないテストであるが、このテストでは人間が人間に口頭で質問をし、その場で採点を行う。オンラインテストとの大きな違いは、試験官の表情を見ながらテストを受けるので、受験者の感情が入りやすくなる。口頭テストでは、言葉だけでなく2次的な表現方法である身振り手振りや声の強

弱、表情などのコミュニケーションの手段が使われやすい。そのため客観性の維持が評価を難しくさせる。

3.2.1 口頭テストの長所

口頭テストの長所は以下のようにまとめられる。

1. 英語を「話す」力と「聞く」力を直接測定することができる。
2. 対面式テストなので、言語以外のコミュニケーション能力を測定することができる。

3.2.2 口頭テストの短所

口頭テストの短所は以下のようにまとめられる。

1. テスト不安や対人恐怖症の場合、能力を正しく測定できないことがある。テスト不安がテスト結果に与える影響に関しては、Horwitz, Horwitz, & Cope (1986), Horwitz (1989), Phillips (1991, 1992), Young (1991), Nagahashi (2007) などの先行研究がある。
2. 採点基準が評価者によって異なる場合があるので、客観的な判断が難しい。
3. 全く同じ質問をすべての生徒に行えば、先に試験を受けた生徒が未受験の生徒に、どのようなことを聞かれたかを教えてしまうことがある。それを避けるために、あらかじめ複数の質問を用意しておいて、その中から質問をする形式をとる必要がある。英検の二次試験でも2通りの試験問題を用意している。
4. 口頭テストの場合、一人一人に時間をとらなければならないので、長時間を消費する。

4 実験手順

4.1 実験計画

テストは、2007年6月高校1年次に履修されるOral Communication I（以下、OCIと記す）の授業時に実施した。OCIの授業は、週1回英語指導助手（Assistant Language Teacher, 以下、ALTと記す）とのチーム・ティーチングで行っており、1学年全員に同じ授業をしている。教科書は文部科学省検定済みの教科書である *Sailing Oral Communication I* (2006) を使用しており、通常2～3時間の授業で1課を終わらせる進度である。

OCIの授業は、英語を聞いて話す力をつけることを目的としているので、実技中心の授業となる。そのため、テストも実技を測定することができる口頭テストを年に2回、前期と後期にそれぞれ1回ずつ設けている。前期のテストではALTと個別に面接する口頭テストを実施し、4つの質問に対する答え方とALTに質問を1つ作るというテストを行った。後期のテストでは2人1組での会話をALTが聞き、それをその場で採点する方式をとった。

本研究では、前期のテストで行った個別の面接式口頭テストを録音してデータとして使用し、同じ質問をオンラインテストで行った際にどのように解答しているかを比較した。

オンラインテストは、口頭テストを実施している授業時間中に並行して行われた。口頭テストは1人ずつ呼び出して試験を受けるので、試験を受けている時間よりも待っている時間の方が圧倒的に長い。待っている時間帯に、復習の意味を兼ねてオンラインテストを受けさせた。呼び出される時間によってオンラインテストを中断したり、口頭テストが終わってから取り掛かったりと、生徒によってオンラインテストに取り組む時間は統一できなかった。オンラインテストは口頭テストではなく筆記試験になるので、口頭テストの練習をしたい生徒は、オンラインテストに取り組まずに友達同士で口頭練習をしている生徒もいた。

オンラインテストは、口頭テストを実施する1週間前の授業時に行った復習シート（資料1）に基づいて作成した。復習シートには口頭テスト実施までに学習したすべての学習内容を含んでおり、オンラインテストには同じ文型の質問を1つにまとめて、26の質問を作成した。口頭テストではALTは受験者に5つの項目しか質問しないが、どの質問をするかはALTがその場で受験者を見て決める。オンラインテストでは26問すべての質問に答えなければならないので、かなりの時間を要したようである。口頭テストと並行して行ったために時間的な制約ですべての質問に答えられずに終わってしまった生徒もいた。また、すべて解答したにもかかわらず回線上のトラブルのために送信エラーで結果が送れなかった生徒が31名いた。

4.2 被験者

高校1年生199名がOCIの授業時に実施した口頭

テストとオンラインテストに参加した。生徒は教室でオンラインテストに取り組みながら、廊下で行われている ALT との口頭テストの順番を待った。口頭テストは個別に行うので、出入りの時間も含めて、1 人当たり約 5 分かかり、2 週に分けて実施した。

オンラインテストは、口頭テストの合間に実施するので、全員一斉に実施したわけではない。また、ALT との口頭テストは、名簿順に行うので、順番が後になるほど先に受けた生徒に情報を聞くことができるので有利になる。そのため、ALT は受験者の能力と順番が後になる生徒に対して、質問の難易度を調整していた。

4.3 採点基準

4.3.1 口頭テストの採点基準

口頭テストの採点基準は、ALT の主観的な採点基準に基づいている。口頭テストは 4 つの質問に英語で答える項目と、ALT に質問をする項目の全部で 5 つの項目があり、それぞれ 10 点満点の合計 50 点満点の配点となっている。

テストを実施する際に、生徒に採点基準を簡単に説明している。10 点満点になるのは、答えをフル・センテンスで即座に答える場合である。単語だけで答えたり、2～3 回聞き返したりした場合は、減点の対象となる。また、わからない場合は “I don't know.” と答えてもよいとしているが、これは何も答えない場合は 0 点となるので、それを避けるための手段である。

表 1 は ALT の評価基準を整理したものである。実際には、ALT は評価基準を文書にせず、頭の中で自分自身の基準に照らし合わせて採点していたが、口頭テストの最中に録音した音声を書字に起こした結果、表 1 のような採点基準ができあがった。

表 1 を見ると、ALT が発音の正確さよりも、質問に正しく応答できるかどうかに重きを置いていることがわかる。質問されてから答え終わるまでにかかった時間によって、評価に差をつけていることがわかる。また、主語と動詞を含んだ文で答えるように指導しているので、答えが不十分な場合は言い直しをさせていた。答えるまでに時間がかかりすぎる場合は、受験者が聞き返さなくてもヒントを与えて、質問を繰り返していた。言い直しや質問の繰り返しも応答し終わるまでにかかった時間に含めるので、時間がかかるに従って採点も厳しくなった。

■ 表 1：ALT による評価基準

評価点	評価基準
10～9	内容が正しく、文法的に大きな間違いはない。
8～7	内容は正しいが、文法的にやや誤りがある。一度で正しい答えができず、言い直しをしたりヒントを与えてもらったりする。
6～5	質問と関係ない内容を答える。1～2 回言い直しをしている。文法的な誤りもややある。
4～3	質問と関係ない内容を答える。2～3 回言い直しをしている。文法的な誤りもややある。解答に要する時間が長かったり、沈黙が多い。
2～1	内容的に間違っている。主語と動詞を含めた文で答えられない。沈黙が多い。ヒントを与えてもらっても答えられない。
0	答えられない。沈黙が長い。答えても最後まで言い切れない。

ALT は沈黙を嫌うので、30 秒以上の沈黙があると、ヒントを与えたり、質問を繰り返したり、時間をカウントダウンしてコミュニケーションが途切れないように努めていた。質問に対して主語と動詞を含んだ文で答えることは、それだけ語数も増え、聞き手に丁寧な印象を与える。初対面の相手にはできるだけ丁寧な対応するために、「主語と動詞を含んだ文で答えさせる」という採点基準は、コミュニケーション能力を測るためにも有効であると思われる。

文法的な誤りに関しては、冠詞がはっきり聞こえない場合は、1 点減点としていた。また、語順が正しくなかったり、主語と動詞を含んだ文で答えていなかったりした場合は、1 点減点となっていた。

内容に関しては、質問に正確に答えていない場合に減点となっていた。例えば、“What day do you have OC class?” と聞かれているのに、“I have OC class once a week.” というように、文法的には正しいが、質問の答えとなっていない場合は 3 点減点であった。

ALT による口頭テストは、「発音よりもコミュニケーション能力を重視して採点している」ことが明らかになった。ALT 自身は、自分で採点基準を明文化していないが、今回の分析により ALT が何を中心に生徒の発話を採点しているかが明確になった。

4.3.2 オンラインテストの採点基準

本研究で使用したオンラインテストは基本的に筆記テストなので、解答の内容に間違いがない場合は、語法や綴りの間違いをもとに減点した。ALT による口頭テストの採点基準と照らし合わせて、内容に問題がなく、主語と動詞を含んだ文で答えていて、文法的な間違いがない場合を10点とした。文法的な間違い、あるいは綴りの間違いを1箇所について1点減点とし、内容面での間違いを2点減点として採点した。表2がオンラインテストの採点基準である。

■ 表2：オンラインテストの評価基準

評価点	評価基準
10～9	内容が正しく、文法的な誤りがない。
8～7	内容は正しいが、文法的な誤りがやや見られる。
6～5	内容は正しいが、主語と動詞を含んだ文で答えられない。
4～3	内容は正しいが、文法および綴りに誤りがある。
2～1	内容が正しくない。答えを知っている質問に対して、“I don't know.” で答えている。
0	質問に対する答えとなっていない。

5 結果

5.1 データの収集方法

口頭テストはALT との口頭テスト実施中にマイクを用意して、ALT とのやり取りを録音した。録音した音声をテスト終了後に文字に書き起こした。オンラインテストは『学びの泉』の「小テスト」にログインして入力した解答をそのまま使用した。解答を入力したがうまく送信できなかった生徒の結果は、名前が履歴として残っていたが、入力した結果は空白となっていた。ソフトウェアの仕様上、再テストは不可能だったので、解答できなかった生徒は欠損値として扱った。

口頭テストはALT が受験者を見て問題を決めるので、受験者のレベルに合った問題が出題される傾向にあった。1 問目の問題にうまく答えられると、2 問目の問題は聞き慣れない単語を使った質問をしていた。例えば、同じ yes/no question でも、“Is he

muscular?” という質問の“muscular”は高校生にとってあまり聞きなれない単語である。この単語の意味がわからずうまく答えられなかった場合は、2 問目からやや平易な質問を与えていた。

5.2 データの分析方法

本研究では、Mplus (Muthén & Muthén, 1998) というソフトウェアを使用した。Mplus とは Linda K. Muthén と Bengt O. Muthén という2人の統計学者によって作成された構造方程式モデリングのソフトウェアである(豊田, 2007)。共分散構造分析には Amos というソフトウェアを使って行われることが多いが、Mplus はパス図の描画はしてくれないものの、欠損値を扱うことができるソフトウェアなので、今回のように欠損値の多いデータの分析に有用であった。

このソフトウェアを使って確認的因子分析(CFA)を行った。説明変数として6項目をデータとして使用し、潜在変数として「コミュニケーション能力」と「英語の文法・語法の正確さ」の2つを採用した(表3参照)。

■ 表3：確認的因子分析に使用したデータ

	説明変数	潜在変数
1	ALT の採点結果	コミュニケーション能力
2	口頭テストで録音された音声を文字に書き起こして採点した結果	
3	質問されてから答えるまでに要した時間の総時間	
4	オンラインテストの採点結果	英語の文法・語法の正確さ
5	2007年7月に実施した模擬試験の結果	
6	2007年7月に実施した語彙サイズテストの結果	

また、口頭テストとオンラインテスト実施後に行ったアンケート結果を使用して、重回帰分析を行った。従属変数と独立変数は表4のとおりである。

コミュニケーション能力と英語の文法・語法の正確さは互いに影響し合うと仮定し、4つの仮説を立てた。

■ 表 4：重回帰分析に使用したデータ

	従属変数	独立変数
1	テスト終了後に行った、2つのテストに関するアンケート結果（4件法）	口頭テスト結果 オンラインテスト結果
2	テスト終了後に行った、2つのテストに関するアンケート結果（複数選択方式）	口頭テスト結果 オンラインテスト結果

仮説 1：オンラインテストは、口頭テストよりも心理的負担が軽減されるので、平均スコアが高くなる。

仮説 2：受験者の英語に対する関心や自信は、口頭テスト結果にプラスの要因として作用する。

仮説 3：受験者のテストに対する不安や緊張感などの心理的負担は、口頭テストおよびオンラインテストの両方にマイナスの要因として作用する。

仮説 4：「コミュニケーション能力」は ALT による口頭テストの結果と最も正の相関が高い。

5.3 データ分析結果

5.3.1 テスト結果の比較

口頭テスト結果（interview）、録音した口頭テストを文字に書き起こした英文の結果（script）、オンラインテスト結果（online）の3つの得点を100点に換算し、それぞれの標本数（ n ）、平均値（ M ）、標準偏差（ SD ）、内的整合性の指標であるクロンバックの α 係数（ α 係数）の数値は表5のとおりである。

■ 表 5：テスト結果一覧

グループ	n	M	SD	α 係数
interview	199	76.80	13.87	0.72
script	199	73.11	17.30	0.65
online	168	79.20	19.00	0.97

口頭テストは被験者199名全員が受けたが、オンラインテストは、時間が足りなくてテストを途中でやめてしまったり、入力がすべて終わっても送信エラーのために解答結果が未解答になってしまったりした生徒が31名いた。ソフトウェアの仕様上、一度解答を始めると途中で解答をやめてしまった場合、

再テストが不可能となるので、未解答の生徒が出たしまった。

テスト形式間における平均値の差を分散分析により検討した。その結果、 $F(2, 563) = 3.01$, $p = 0.002$ であり、テスト形式の違いによる平均値の差は有意であった。さらに、チューキーの方法による多重比較の結果、interview と script 間と script と online 間でその差は5%水準で有意となった。

テストの信頼性を検討する指標として、クロンバックの α 係数を算出した。内的整合性の観点から見れば、オンラインテストは信頼性が高いが、口頭テストの信頼性はあまり高くない。また、標準偏差の数値から、得点のばらつきが最も大きいのはオンラインテストで、口頭テストは得点のばらつきが最も小さいことがわかる。このことから、同じ採点基準を採用していても、オンラインテストの方がより客観性が保たれ、口頭テストは採点者の主観により得点の差が出にくくなっていると推測される。

5.3.2 OC テストのアンケート結果：その1

口頭テスト終了後、口頭テストとオンラインテストに関するアンケート調査を行った。アンケート調査（資料2）は、最初に英語や中学校のときの発音練習に関する意識を、1（あてはまらない）から4（よくあてはまる）の4件法で行った。質問項目は、以下の4項目である。

1. 英語が好きである。
2. 発音に自信がある。
3. 外国人と話すことに抵抗がない。
4. 中学校のときの発音練習によく参加した。

この4つの項目が、口頭テストの得点とオンラインテストの得点にどのように影響を与えているかについてそれぞれの関係を検討するために重回帰分析を行った。これらの変数の記述統計量および相関係数は表6と表7のとおりである。

また、重回帰分析の結果は表8と表9のとおりである。口頭テストの決定係数は $R^2 = 0.06$ 、オンラインテストの決定係数は $R^2 = 0.001$ であった。

5.3.3 OC テストのアンケート結果：その2

次に、口頭テストとオンラインテストを受けた感想をそれぞれ13項目挙げ、自分の気持ちに該当する

■ 表 6：記述統計量（口頭テスト）

変数		M	SD	1	2	3	4
従属変数：	口頭テスト	76.80	13.90	0.27	0.22	0.12	0.05
独立変数：	1. 英語が好きである	2.77	0.74		0.44	0.19	0.31
	2. 発音に自信がある	1.83	0.68			0.41	0.30
	3. 外国人と話すことに抵抗がない	2.46	0.85				0.29
	4. 中学校のときの発音練習によく参加した	2.87	0.84				

■ 表 7：記述統計量（オンラインテスト）

変数		M	SD	1	2	3	4
従属変数：	オンラインテスト	79.20	19.00	0.11	-0.01	0.01	0.12
独立変数：	1. 英語が好きである	2.77	0.74		0.44	0.19	0.31
	2. 発音に自信がある	1.83	0.68			0.41	0.30
	3. 外国人と話すことに抵抗がない	2.46	0.85				0.29
	4. 中学校のときの発音練習によく参加した	2.87	0.84				

■ 表 8：重回帰分析結果（口頭テスト）

変数	B	SEB	β	p 値
英語が好きである	2.13	0.74	0.23	0.01*
発音に自信がある	1.28	0.84	0.13	0.31
外国人と話すことに抵抗がない	0.38	0.63	0.05	0.32
中学校のときの発音練習によく参加した	-0.58	0.62	-0.07	0.09
切片	30.89	2.31		0.00

■ 表 9：重回帰分析結果（オンライン）

変数	B	SEB	β	p 値
英語が好きである	3.23	2.38	0.13	0.18
発音に自信がある	-2.76	2.56	-0.1	0.30
外国人と話すことに抵抗がない	-0.12	1.99	-0.01	0.96
中学校のときの発音練習によく参加した	2.44	2.01	0.11	0.23
切片	68.64	7.25	3.62	0.00

項目を複数選択可能で回答させた。項目はそれぞれ以下のとおりである。

口頭テスト：

- 緊張した。
- 頭が真っ白になった。
- 何を聞かれているのかわからなかった。
- 聞かれていることはわかったが、うまく答えられなかった。
- もっと英語で話したかった。
- 楽しかった。
- 答え方がわからなくて困った。
- もっと練習しておけばよかった。
- 簡単だった。
- 試験時間が短かった。
- 試験時間が長かった。
- 待っている時間が長かった。

m. その他

オンラインテスト：

- タイプに慣れていないので、入力に時間がかかった。
- 文字が読めるので、答えるのは簡単だった。
- 今までやったことを忘れていて、答え方がわからなかった。
- 問題数が多すぎる。
- 紙に書くよりタイプの方がよい。
- 楽しかった。
- 答えを見ながらできた。
- 周りの人に答えを聞きながらやった。
- 途中で PC がおかしくなって、入力していた画面が消えた。
- 試験問題は紙で出題してほしい。

- k. やらなかった。
- l. 最後まで終わらなかった。
- m. その他

項目によって選択する人数が異なるので、実験に
使ってよい項目を選別するために F 検定を行った。
 F 比と 5 % 水準に必要な F 値は表10と表11のと
おりである。次に、それぞれの項目における平均値の
差を、有意水準 5 % で片側検定の t 検定により検討
した。その結果は表10（口頭テスト結果）と表11
（オンラインテスト結果）のとおりである。 F 検定

により分散に差がなく、平均値に有意差のあった項
目を太字で表している。

平均値の差に有意があった項目は、口頭テストで
は c. 「何を聞かれているのかわからなかった」、
g. 「答え方がわからなくて困った」、i. 「簡単だっ
た」、j. 「試験時間が短かった」の 4 項目であった。

一方、オンラインテストで有意があったのは、
b. 「文字が読めるので、答えるのは簡単だった」と
f. 「楽しかった」の 2 項目であった。

■ 表10： t 検定結果（口頭テスト）

口語テスト	選択あり			選択なし			t			F	
	n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差	自由度	t	p	F 比	F 値
a	99	38.78	6.45	92	38.25	7.37	181	0.52	0.30	0.77	0.71
b	33	36.70	6.49	158	38.91	6.94	48	-1.73	0.05	0.90	0.61
c	20	34.45	6.73	171	39.00	6.78	24	-2.79	0.01	1.03	1.65
d	79	38.56	5.50	112	38.50	7.76	189	0.06	0.48	0.50	0.70
e	34	39.76	6.34	157	38.25	7.00	51	1.22	0.11	0.84	0.61
f	47	40.19	6.42	144	37.98	6.98	84	1.99	0.02	0.86	0.66
g	23	35.13	7.46	168	38.99	6.70	27	-2.31	0.01	1.29	1.61
h	36	36.39	6.25	155	39.20	6.96	57	-2.20	0.02	0.82	0.62
i	16	43.56	4.53	175	38.60	6.91	22	4.29	0.00	0.46	0.48
j	29	42.59	3.80	162	37.80	7.09	68	5.26	0.00	0.30	0.59
k	2	27.50	10.50	189	38.64	6.77	1	-1.06	0.24	4.79	3.89
l	6	42.17	4.30	185	38.46	6.95	6	1.89	0.05	0.46	3.89
m	2	29.50	1.50	189	38.62	6.88	1	-5.76	0.05	0.46	0.23

■ 表11： t 検定結果（オンラインテスト）

オンライン テスト	選択あり			選択なし			t			F	
	n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差	自由度	t	p	F 比	F 値
a	73	78.0	16.2	95	80.1	19.0	156	-0.72	0.24	0.97	0.69
b	38	84.9	12.6	130	77.5	20.1	96	2.69	< 0.01	0.40	0.63
c	20	74.0	22.3	148	79.9	18.3	22	-1.11	0.14	1.54	1.66
d	44	78.6	18.1	124	79.4	19.2	80	-0.25	0.40	0.89	0.64
e	18	74.4	22.2	150	79.8	18.4	20	-0.95	0.18	1.53	1.69
f	15	85.9	9.61	153	78.5	19.5	26	2.43	0.01	0.23	0.46
g	13	87.2	13.4	155	78.5	19.2	16	2.06	0.03	0.53	0.43
h	7	83.7	18.2	161	79.0	18.9	6	0.62	0.28	1.07	2.16
i	9	75.7	19.0	159	79.4	18.9	9	-0.53	0.30	1.20	2.00
j	15	79.0	16.7	153	79.2	19.1	18	-0.05	0.48	0.82	0.46
k	2	N/A	N/A	187	79.2	18.9	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
l	6	62.5	16.8	162	79.8	18.7	5	-2.27	0.04	0.96	0.23
m	3	95.0	0.0	186	79.1	19.0	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A

5.3.4 確認的因子分析結果

日本人英語学習者の英語力を「コミュニケーション能力」と「文法・語法の正確さ」の2つの要因に分けて、それぞれを潜在変数として確認的因子分析を行った。その結果は、表8、表9に示すように、5%水準ですべて有意である推定値（標準化推定値）が得られた。適合度指標は、CFI = 0.989, RMSEA = 0.058であり、十分な適合を示した。

Mplus による出力結果は表12のとおりである。数値はすべて標準化したものである。図3は分析結果をパス図で表したものである。

オンラインテストの平均値が最も高く、次に口頭テスト結果、最後に script の採点結果となった。

オンラインテスト結果が口頭テスト結果より高くなることは予想どおりであった。なぜなら、オンラインテストは質問する相手がコンピュータであるため、心理的ストレスがかなり軽減されると思われるからである。質問項目を文字で読めるため、聞き直すことをせずに自分のペースで解答を進めることができ、相手に対する気遣いの必要がないからであろうと思慮される。

また、オンラインテストで正解している質問が、口頭テストでは不正解となっている生徒がいた。例えば、“Is he tall?”という質問に対して、“tall”という発音がうまく聞き取れなくて何度も単語を聞き返していたが、意味がわからずうまく答えられなかったようである。このことから、日本人英語学習者は音声による質問が不得手であり、文字情報による質問の方が得意であるということが明らかになった。

6 考察

6.1 仮説 1 の検証

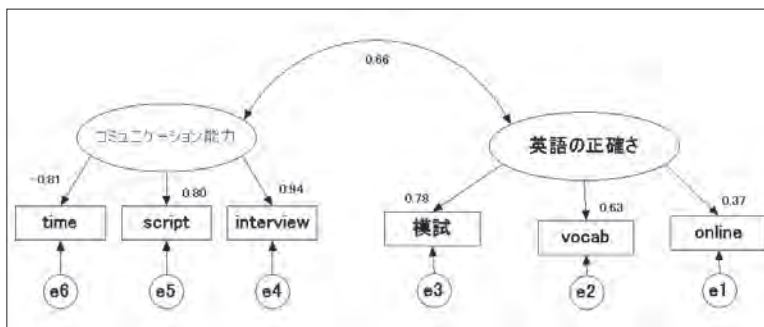
口頭テスト結果、録音した口頭テストを文字に書き起こした英文の採点結果（script）、オンライン試験結果の3つのテスト結果の平均値を比較すると、

■ 表12：Mplus による出力結果（標準化推定値）

	Estimate	S.E.	Est. / S.E.	Two-Tailed
コミュニケーション能力 by				
口頭試験	0.941	0.021	45.357	0.000*
スクリプト	0.799	0.031	26.179	0.000*
かかった時間	-0.813	0.030	-27.385	0.000*
英語の語法・文法の正確さ by				
online	0.372	0.081	4.584	0.000*
語彙	0.633	0.061	10.298	0.000*
模試	0.783	0.059	13.268	0.000*
コミュニケーション能力 by				
正確さ	0.661	0.063	10.435	0.000*

(注) * < 0.01

▶ 図3：確認的因子分析のパス図



6.2 仮説 2 の検証

表 8 と表 9 から英語に対する関心や自信は 2 つのテスト結果にあまり影響を与えていないことがわかる。しかし、「英語が好き」であることが口頭テスト結果にプラスの影響を与えていることが読み取れる。「英語が好き」と答えた生徒は、特に英語母語話者との会話を要望する一方で、文法の学習に嫌悪感を持っている生徒も少なくない。「英語が好き」と答えた生徒の中には、英語母語話者との意思疎通に長けているが、文法や語法の正確さはあまり身につけていない、ということが考えられる。

しかし、今回の調査では、口頭テストの決定係数が $R^2 = 0.06$ 、オンラインテストの決定係数が $R^2 = 0.001$ と、両方の決定係数が大変低かったので、質問項目がテスト結果を十分説明しているとは言い難い。また別の機会に質問内容を変えて再調査する必要がある。

6.3 仮説 3 の検証

表 10 と表 11 から口頭テストでは、c.「何を聞かれているのかわからなかった」と g.「答え方がわからなくて困った」の 2 項目がテスト結果にマイナスの要因として作用し、i.「簡単だった」と j.「試験時間が短かった」の 2 項目がテスト結果にプラスの要因として作用していることがわかった。

一方、オンラインテストでは、b.「文字が読めるので、答えるのは簡単だった」と f.「楽しかった」の 2 項目がテスト結果にプラスの要因として作用していることがわかった。それぞれの共通項として「楽しかった」を選択した生徒の平均値が、選択しなかった生徒よりも高かったことが大変興味深いところである。テストそのものを楽しむ余裕がある生徒は、テスト結果にもよい影響を与えることがわかる。

また、口頭テストが終わった後に、多くの生徒が a.「緊張した」と答えていたが、「緊張」はそれほどテスト結果に影響を与えていないことが表 10 から読み取れる。しかし、b.「頭が真っ白になった」を選択した生徒と選択しなかった生徒を比べると、選択した生徒の平均点の方が低いことがわかる。「頭が真っ白になる」状態とは、何を答えてよいかわからない状態である。そのため、ALT の質問に答える時間がかかってしまう。答えに要する時間が長いほど、テスト結果はよくないので、「緊張」よりも「頭

が真っ白になる」ことの方がコミュニケーションの支障になるということが明らかになった。

表 11 から、オンラインテストは b.「文字が読めるので、答えるのは簡単だった」という項目がテスト結果にプラスの影響を与えていることがわかる。日本人学習者には、質問が文字情報として与えられている方が、音声情報として与えられるよりも答えやすくテスト結果がよくなるということが読み取れる。逆に、口頭テストで c.「何を聞かれているのかわからなかった」という項目がテスト結果にマイナスの影響を与えていることがわかる。このことより、日本人学習者は音声情報によるテスト形式が苦手だということが読み取れる。これは、リスニングが苦手だと訴える生徒が非常に多いことと合致し、今後は「文字と音声をつなげる工夫を授業の中で組み入れる必要がある」ことが示唆された。

6.4 仮説 4 の検証

「コミュニケーション能力」と「英語力」を同時に測ることは可能なのだろうか。対面式面接の場合は、目の前に人間がいるので「コミュニケーション能力」を最大限に活用する必要がある。一方でオンラインテストでは「コミュニケーション能力」よりも「英語の知識」を測ることができる。コミュニケーション能力は英語力だけの問題ではない。日常生活での人間関係や環境が大きな影響を与えると Hymes (1972) や Bachman (1990) が指摘している。

「コミュニケーション能力」に影響を与える因子として「口頭テスト結果」が最も影響力が強く、「時間」はマイナス要因として働くことがわかった。つまり、質問されてから答え終わるまでにかかった時間が長いほど「コミュニケーション能力」は低くなるということである。「コミュニケーション能力」の向上を考えるならば、あまり間を空けずにきちんとした英文で受け答えをする必要があることが本研究からわかった。

また、「文法・語法の正確さ」は模擬試験の結果と最も高い相関があり、オンラインテスト結果とは最も低い相関があるということがわかった。オンラインテストはテスト結果の信頼性は高いが、「コミュニケーション能力」にも、「英語の文法・語法の正確さ」にもあまり関係がないことがうかがえる。今後は、どのような能力がオンラインテストと相関が

あるのかを、さまざまな角度で検証していく必要があると思われる。

6.5 日本人学習者に適したテスト形式とは

口頭テストの評価基準を作成して、「ALT が発音やアクセントではなく、何をどのように答えるかに重きを置いているのか」が明らかになった。

口頭テストでは、質問に対して正しく答え、相手に質問できる能力を測ることを目的とし、それをコミュニケーション能力と呼んでいる。問題は、日本語のコミュニケーションの仕方が、英語母語話者のコミュニケーションの仕方と全く同じではないことである。中津（2006）はどのようなときに日本語母語話者と英語母語話者の間に、コミュニケーションによる摩擦が生じるかをリストにして提示しており、英語を教えるときには英語母語話者とのコミュニケーションの違いを理解する必要があると説いている。

オンラインテストでは「英語の文法や語法の正確さ」がテスト結果に影響を与えていると仮説を立てたが、ほとんど影響を受けていないことがわかった。これはおそらく、オンラインテストの実施時間を統一していなかったためではないかと思われる。オンラインテストも口頭テストと同じように、解答時間を測って観測変数の1つに加えれば、また違った結果が得られたのではないだろうか。

今回の研究では、「コミュニケーション能力」を測るには、口頭テストの方がオンラインテストよりも日本人学習者には適していると考えられるが、オンラインテストの回線の不備やテスト時間の統一などを改善し、より正確なテスト結果を測定して再度比較することが必要である。

7 今後の課題

オンラインテストは自分のペースで解答することができるが、対面式の口頭テストでは聞き手と話し手の応答時間がテスト結果に影響を与える。このようなコミュニケーションのストラテジーを授業の中で教えていかなければ、生徒は質問されたことがわからなくても覚えている英文を意味もわからず答えてしまうか、沈黙を続けてしまう。本研究の結果から、口頭テストの方がコミュニケーション能力を測るのに適していることが明らかになったが、テストの信頼性を高めることが今後の課題として挙げられる。

オンラインテストは、物理的な環境整備がなければ実現は難しい。今回のテストでも、解答したにもかかわらず、回線の不具合で送信エラーになってしまった生徒が31名もいた。筆記試験であれば、紙が破れても新しいものを取り替えればすぐに済むが、オンラインテストの場合は、一度送信してしまうと再テストできない場合がある。今回のテストでは、あらかじめ再テストを許可しない設定となっていたので、送信エラーで解答が送れなくても「解答済み」となってしまう、再テストが不可能であった。また、試験時間を統一し、全生徒が同時に始める必要があることもわかった。

口頭テストはコミュニケーション能力を測るのに、確かに有効であるが、今後はオンラインテストの改善を重ねて、スピーキング・テストをコンピュータで行えるようにすれば、ALT による主観的評価とコンピュータによる客観的評価の2通りの評価ができる。そうすれば、より正確にコミュニケーション能力を測定することが可能となるであろう。

謝 辞

本研究をこのような形で発表する機会を与えてくださった（財）日本英語検定協会と選考委員の先生方に心より感謝いたします。特に助言者の池田央先生、さらに、研究過程において適格なアドバイスと示唆をくださった関西大学の北村裕先生に厚く御礼申し上げます。

参考文献 (*は引用文献)

- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢. (2007). 『入門 共分散構造分析の実践』. 東京: 講談社サイエンティフィク.
- * Bachman, L.F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- * Bachman, L.F. & Palmer, A.S. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- * British Council. (2009). *IELTS*. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.britishcouncil.org/jp/japan-exams-ielts.htm>
- * Brown, J.D. (2005). *Testing in language programs: A comprehensive guide to English language assessment*. New York: McGraw-Hill.
- * Cambridge ESOL Examinations Centre JP040. (2009). Cambridge ESOL Examinations. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.cambridgeesol.org/exams/index.html>
- * CIEE: Council on International Educational Exchange. (2008). TOEFL テスト. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.cieej.or.jp/toefl/index.html>
- * Dunkel, P. (1999). Considerations in developing or using second/foreign language proficiency computer-adaptive tests. *Language Learning & Technology*, 2, 2, 79-93.
- * ETS: Educational Testing Service. (2009). TOEICテスト. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.toeic.or.jp/>
- Gorsuch, G. (2004). Test takers' experiences with computer-administered listening comprehension tests: Interviewing for qualitative explorations of test validity. *Calico Journal*, 21, 2, 339-371.
- Heaton, J.B. (1988). *Writing English language tests*. London: Longman Group UK Limited.
- * Horwitz, E.K. (1989). Facing the blackboard: Student perceptions of language learning and the language classroom. *ADFL Bulletin*. 20, 3, 61-64.
- * Horwitz, E.K., Horwitz, M.B., & Cope, J. (1986). Foreign Language Classroom Anxiety. *Modern Language Journal*, 70, 2, 125-132.
- * Hughes, A. (2003). *Testing for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- * Hymes, D. (1972). On communicative competence, pride, J.B. & Hommes, J. (eds.) (1972), *Socio-linguistics: Selected readings*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books Ltd.
- * 池田央. (2001). 『現代テスト理論』. 東京: 朝倉書店.
- 石村貞夫. (2001). 『すぐわかる統計処理』. 東京: 東京図書株式会社.
- 石村貞夫. (2008). 『すぐわかる多変量解析』. 東京: 東京図書株式会社.
- 狩野裕・三浦麻子. (2007). 『グラフィカル多変量解析』. 京都: 現代数学社.
- * Kenyon, D.M. & Malabonga, V. (2001). Comparing examinee attitudes toward computer-assisted and other oral proficiency assessments. *Language Learning & Technology*, 5, 2, 60-83.
- Kitao, S.K., & Kitao, K. (1996, May 5). Testing communicative competence. *The Internet TESL Journal*, 2, 5. 1-6. Retrieved March 19, 2009, from <http://iteslj.org/Articles/Kitao-Testing.html>
- 小塩真司. (2008). 『初めての共分散構造分析—Amosによるパス解析』. 東京: 東京図書.
- 三浦省吾・前田啓朗・山森光陽・磯田貴道・広森友人. (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門』. 東京: 大修館書店.
- 文部科学省. (2009). 「新しい学習指導要領 新旧対照表」. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.mext.go.jp/>
- * Muthén, L.K., & Muthén, B.O. (1998). *Mplus user's guide*. Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.
- * Nagahashi, T.L. (2007). A cross-sectional study of foreign language learning anxiety among freshmen at Akita University. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 29, 93-102.
- * 中津燎子. (2006). 『英語と運命』. 東京: 三五館.
- * NEC. (2001). 『学びの泉』.
- 大谷泰照. (2007). 『日本人にとって英語とは何か—異文化理解のあり方を問う』. 東京: 大修館書店.
- * 大友賢二・中村洋一. (2004). 『テストで言語能力は測れるか—言語テストデータ分析入門—』. 東京: 桐原書店.
- 大関篤英・高梨庸夫・高橋正夫. (1987). 『英語科教育法』. 東京: 金星堂.
- * Phillips, E.M. (1991). Anxiety and oral competence: Classroom dilemma. *French Review*. 65, 1, 1-14.
- * Phillips, E.M. (1992). The effects of language anxiety on students' oral test performance and attitudes. *Modern Language Journal*, 76, 2, 14-26.
- Roever, C. (2001). Web-based language testing. *Language Learning & Technology*. 5, 2, 84-94.
- * Russell, M. & Haney, W. (1997). Testing writing on computers: An experiment comparing student performance on tests conducted via computer and via paper-and-pencil. *Education Policy analysis Archives*. 5, 3, 1-20. Retrieved January 4, 2009, from <http://epaa.asu.edu/epaa/v5n3.html>
- * Schaeffer, G.A., Bridgeman, B., Golub-Smith, M.L., Lewis, C., Potenza, M.T. & Steffen, M. (1998, April). Comparability of Paper-and-Pencil and Computer Adaptive Test Scores on the GRE General Test. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/RR-98-38-Schaeffer.pdf>
- * 静哲人. (2002). 『英語テスト作成の達人マニュアル』. 東京: 大修館書店.
- 竹内光悦・酒折文武. (2006). 『Excel で学ぶ理論と技術 多変量解析入門』. 東京: ソフトバンククリエイティブ

- イティブ株式会社。
- * 豊田秀樹.(2007).『共分散構造分析 [Amos 編] —構造方程式モデリング—』. 東京：東京図書。
- 内田治・菅民郎・高橋信.(2005).『文系にもよくわかる多変量解析』. 東京：東京図書。
- * 若林俊輔・根岸雅史.(2000).『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』. 東京：大修館書店。
- Warschaure, M. (1996). Comparing face-to-face and electronic discussion in the second language classroom. *CALICO Journal*, 13, 2&3, 7-26.
- * 山田雄一郎.(2006).『英語力とは何か』. 東京：大修館書店。

- * 八島智子他.(2006). *Sailing Oral Communication I*. 大阪：啓林館。
- * Young, D.J.(1991). The relationship between anxiety and foreign language oral proficiency ratings. In E. K. Horwitz & D.J. Young (Eds.), *Language anxiety: From theory and research to classroom implications* (pp.57-63). Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- * 財団法人日本国際連合協会.(2009). 国連英検. Retrieved April 12, 2009, from <http://www.kokureneiken.jp/>

資 料

資料1：復習シート (*は口頭テストで使われた質問)

Is she about 20?
— Yes, she's about 20. / No, she isn't about 20.

Is he over 30?
— Yes, he is over 30. / No, he isn't over 30.

Is he in his 40s?
— Yes, he is in his 40s. / No, he isn't in his 40s.

Does she live in Tokyo?
— Yes, she lives in Tokyo. / No, she doesn't live in Tokyo.

Is she from Japan?
— Yes, she's from Japan. / No, she isn't from Japan.

Is she Japanese?
— Yes, she's Japanese. / No, she isn't Japanese.

Is he American?
— Yes, he's American. / No, he isn't American.

* Does she have long hair?
— Yes, she has long hair. / No, she doesn't have long hair.

* Does he have blond hair?
— Yes, he has blond hair. / No, he doesn't have blond hair.

* Does she have brown hair?
— Yes, she has brown hair. / No, she doesn't have brown hair.

* Does he have a wife?
— Yes, he has a wife. / No, he doesn't have a wife.

* Does she have a husband?
— Yes, she has a husband. / No, she doesn't have a husband.

Does she have any children?
— Yes, she has two children. / No, she doesn't have any children.

* Is he tall?
— Yes, he's tall. / No, he isn't tall.

Is she small?
— Yes, she's small. / No, she isn't small.

Is she short?
— Yes, she's short. / No, she isn't short.

* Is he muscular?
— Yes, he's muscular. / No, he isn't muscular.

Is he an actor?
— Yes, he's an actor. / No, he isn't an actor.

Is she an actress?
— Yes, she's an actress. / No, she isn't an actress.

Is he a singer?
— Yes, he's a singer. / No, he isn't a singer.

* Is he a comedian?
— Yes, he's a comedian. / No, he isn't a comedian.

* Is he an athlete?
— Yes, he's an athlete. / No, he isn't an athlete.

Is he an artist?
— Yes, he's an artist. / No, he isn't an artist.

Nice to meet you.
— Nice to meet you, too.

My name is ~. What's your name?
— I'm _____.

* What do you like?
— I like _____ and _____.

Where do you live?
— I live in _____.

How old are you?
— I'm _____ years old.

What do you do?
— I'm a _____.

What do you do in your free time?
— I _____ and _____.

When is your birthday?
— My birthday is _____.

Where does Ichiro live?
— I don't know, but maybe he _____.

How old is he?
— I don't know, but maybe he's _____.

* What does he do?
— He is a _____.

What does he do in his free time?
— I don't know, but maybe he _____.

* How often do you have OC class?
— I have OC class _____ a week.

- *How often do you have music class?
— I have music class _____ a week.
- *How often do you have PE class?
— I have PE class _____ a week.
- *What day do you have OC class?
— I have OC class on _____.
- *What period do you have OC class on Wednesday?
— I have OC class in the _____ period on Wednesday.
- *What time does OC class begin on Wednesday?
— It begins at _____.
- *Is there any subject you hate?
— Yes, I hate _____. / No, there isn't.
- *Make a question about Ayumi Hamazaki.

資料 2：OC テストに関するアンケート

このアンケートは、Oral Communication I のテストに関する意識調査です。該当する記号を○印で囲んでください。回答は成績に関係ありませんので、正直に答えてください。

- Q1 英語という教科は、
4 とても好きである。 3 まあ好きである。
2 あまり好きではない。 1 全く好きではない。
- Q2 発音には、
4 かなり自信がある。 3 まあ自信がある。
2 あまり自信がない。 1 全く自信がない。
- Q3 外国人と英語で話すことには
4 抵抗がない。 3 あまり抵抗がない。
2 やや抵抗がある。 1 とても抵抗がある。
- Q4 中学の英語の授業で、発音や会話の練習には、
4 積極的に参加した。
3 時々参加した。
2 あまり参加しなかった。
1 全く参加しなかった。
- Q5 中学生のとき、学校以外で英会話や発音の練習をしたり、指導を受けたりしたことがありますか？
(複数回答可)
a 自宅で CD を聴いて練習した。
b 自宅でラジオやテレビの英会話番組を見て(聴いて)練習した。
c 英会話学校や塾で日本人の先生に指導してもらった。

- d 英会話学校や塾で外国人の先生に指導してもらった。
e 英語のできる家族(父母、兄弟)から直接指導を受けた。
f 英語圏の国に行ったことがある。
(滞在期間： 時期：)
g その他()

Q6 Oral Interview のテストを受けたときの、あなたの気持ちを教えてください。(複数回答可)

- a 緊張した。
b 頭が真っ白になった。
c 何を聞かれているのかわからなかった。
d 聞かれていることはわかったが、うまく答えられなかった。
e もっと英語で話したかった。
f 楽しかった。
g 答え方がわからなくて困った。
h もっと練習しておけばよかった。
i 簡単だった。
j 試験時間が短かった。
k 試験時間が長かった。
l 待っている時間が長かった。
m その他()

Q7「学びの泉」の小テストを受けたときの、あなたの気持ちを教えてください。(複数回答可)

- a タイプに慣れていないので、入力に時間がかかった。
b 文字が読めるので、答えるのは簡単だった。
c 今までやったことを忘れていて、答え方がわからなかった。
d 問題数が多すぎる。
e 紙に書くよりタイプの方がよい。
f 楽しかった。
g 答えを見ながらできた。
h 周りの人に答えを聞きながらやった。
i 途中で PC がおかしくなって、入力していた画面が消えた。
j 試験問題は紙で出題してほしい。
k やらなかった。
l 最後まで終わらなかった。
m その他()

Q8 Oral Interview についての感想を、自由に書いてください。